永禄6年と天正13年の式年遷宮について

－ 中世伊勢神宮の造営組織に関する研究 その4 －

REBUILDING PROJECTS FOR ISE-JINGU IN THE EIROKU ERA (1563)

AND THE TENSHO ERA (1585)

－ A study on construction organization of the medieval Ise-Jingu Part 4 －

浜 島 一 成*

Kazunari HAMAJIMA

For the rebuilding in the Eiroku era(1563), a contract price was determined in each of principal phases of the project of the Shoden. The contract prices for buildings other than the Shoden were separately determined for those buildings. For the rebuilding in the Tensho era(1585), on the other hand, the total contract price was fixed first and was then taken into consideration for determining the number of buildings to be constructed and other items.

Keywords : ISE-JINGU, Carpenters, Contract, the late 16th century

伊勢神宮, 建築工匠, 請負, 16世紀後期

1. はじめに

本研究は、中世伊勢神宮における作所や神宮工の活動内容の実態を検証し、その造営組織としての特色を明らかにするもので、本稿はその第4稿にあたる。

これまで、神宮等によって組織された作所・小作所と呼ばれる造営組織の性格や、その影響のもと編成された神宮工(頭工・頭代・小工)の系譜等について検討し、さらに、14・15世紀における伊勢神宮社殿の請負工事の実態について検討した¹⁾。

ところで、伊勢神宮では、式年遷宮が15世紀中期から100年以上にわたり中断し、その中断の後の16世紀後半に行われたものとして、永禄6年(1563)の外宮式年遷宮と天正13年(1585)の内・外両宮の式年遷宮がある。永禄6年の式年遷宮は、天文20年(1551)の慶光院清順の勧進が契機となり、天文24年正月に本宮5社殿(正殿・東西宝殿・御饌殿・外幣殿)と瑞垣、一〜三ノ鳥居の造営が決まり工事が始まるが、永禄元年(1558)に正殿の立柱・上棟が行われた後は、資金難のため工事は遅れ、ようやく永禄6年9月に正遷宮が行われる²⁾。一方、天正13年の式年遷宮は、慶光院周養の勧進に対し、天正10年(1582)に織田信長が造営費用の寄進を行い、さらに、その信長の志を継いだ豊臣秀吉も造営費用の寄進を行い、天正13年10月に正遷宮が行われる。

上述のように、永禄6年や天正13年の造営工事は、それまでの工事と異なり、勧進僧(尼)主導によるものである。そして、大河直躬博士は、中世における大規模な工事の中で、請負が認められる実例として、永禄6年の造営工事を挙げる。大河博士は、伊勢神宮では、中世前期において、工匠の出勤日数によって賃金が支給されるのに対し、この造営工事では、賃金の総額をあらかじめ決定して請負う形態であり、しかも請負は手間賃のみで、材木・飾り金具等の材料は含まれず、また、頭工と小工の集団が請負うと指摘する³⁾。

ところが、伊勢神宮では、既に14・15世紀において、正殿以外の殿舎に「請屋」つまり請負が行われるものの⁴⁾、この永禄6年や天正13年の造営工事では、正殿についても請負が行われる。そこで本稿では、まず、永禄6年の式年遷宮について、その造営工事の経過が詳述された「永禄記」⁵⁾をもとに、正殿と正殿以外の殿舎に分け、各殿舎の請負状況を工事の進行にあわせて検討する。次に、天正13年の式年遷宮について、織田信長・豊臣秀吉が寄進した造営費用が神宮工に支払われた経過や、また、支払われた名目や金額等を整理し、さらに、それら造営費用の用途について検討する。以上、両造営工事を詳細に検討することにより、16世紀後半期の式年遷宮における請負の実態について一考察を試みる。

本稿は、平成19年の日本建築学会学術講演梗概集で発表した内容に、新たな知見を加えて論述したものである。

* 日本大学理工学部理工学研究所 研究員・工博

Researcher, Research Institute of Science and Technology, College of Science and Technology, Nihon University, Dr. Eng.

2. 永禄6年の式年遷宮

(1) 正殿の工事について

正殿では、山入（造営用の材料を杣山から切り出す作業）や、木作始、立柱・上棟といった主要な工事の区切りごとに請負金額を決める。そこで、主要工事ごとにその経過を記す。

(イ) 山入

天文24年（1555）正月27日に、作所より山入料を500貫文との申し出があったが、神宮工はそれに同意せず、4月16日に700貫文（山入りに前に500貫文、材木が宮中に到着時に200貫文）で同意する。

ところで、山入料が700貫文と決まるものの、「外宮解」に⁶⁾、
一、天文廿四年四月十四日、正遷宮山口祭アリ、祭主下向アツテ
六十二月 式 前 公用
常之祭礼之儀職ニテ神事アリ、従清順上人、頭工 三千貫之約
束ニテ、本宮五社□□□カキ鳥居迄請取、御木作始、弘治三
年六月八日ニ執行也（中略）山口祭ヨリ木作始ニ至迄、先千百
貫之分作所へ渡ル、則頭工請取

とあり、4月14日の山口祭に関する記述から、神宮工は正殿等の一連の工事を3000貫文で請負ったことがわかる。また、山口祭から木作始にかけて、作所から神宮工へ1100貫文支払われたとある。これは、後述するように、木作始が400貫文で請負われるため、山入料と木作始を合算した金額と考えられる。

さらに、永禄元年（1558）5月9日条に、

（前略）此日去年四百貫之内、四十五貫作所預りさん用有、七百貫渡、口ぬき廿一貫引、京任料廿三貫七百五十文引、山入五十貫、口ぬき壹貫五百引、其他又京より壹貫御つけ、合四十六貫二百五十文也（後略）

とあり、山入料700貫文の他に、さらに山入料50貫文が記されており、作所と神宮工の合意した山入料に補充がなされたといえる。そのため、4月16日に合意した山入料700貫文は、あくまでも工事費の概算であり、工事費用を制限するものではなかったといえる。

(ロ) 木作始

弘治3年6月7日に、作所の申し出のとおり木作始が請負額400貫文で合意し、翌8日に木作始の祭儀が行われる。そして、弘治3年6月11日には、工事費の一部が神宮工に支払われる。

ところで、同年12月25日条に「相残四十五貫作所預り也」とあり、工事費の残り45貫文を作所が預かったことがわかる。そして、前に引いた永禄元年5月9日条から、山入料700貫文の口抜き21貫文⁷⁾に、任料23貫750文と、山入料50貫文の口抜き1貫500文を加えた46貫250文の作所得分に、この預かった45貫文を宛てたことがわかる。

(ハ) 立柱・上棟

永禄元年3月20日条の「御立柱上棟勘文副状」には、立柱を4月13日、上棟を立柱と同日もしくは6月23日に行う陰陽頭勘文が記されるが、この後暫くは、立柱上棟に関する記述は見出せない。しかし、永禄元年5月2日条に、「三百五十貫文にて同心申」とあり、その後、正殿の立柱・上棟に関する記事が続くため、立柱・上棟が請

負額350貫文で合意したと考えられる。結局、立柱は6月19日、上棟は6月23日に行われる。

また、永禄元年閏6月16日に、作所が神宮工へ100貫文を渡した際に「御ふき、ミつかきまてのやくそく有」と記されており、5月2日条の「同心申」には、正殿と瑞垣の屋根葺き料も含まれていた可能性がある。この後、正殿等の屋根工事は大幅に遅れ、永禄6年7月2日より再開する。しかし、その再開直前の永禄6年（1563）6月29日に、萱葺師が作所へ葺賃を要求する。作所は、請負金額3000貫文中に葺賃が含まれると始めは拒否したが、後に、葺賃4貫500文のうちの2貫文を負担する。

(2) 瑞垣・東宝殿・西宝殿・御饌殿・外幣殿の工事について

永禄2年3月の「外宮解」⁸⁾に「右御造替之事、就被仰出、既本宮御立柱、上棟如形奉造立之处、依御造料未足、東西宝殿其外于今事不相調之条」とあり、正殿は主要部の工事が完了するが、正殿以外の東・西宝殿等は未だ工事が始まっていないことがわかる。以下、正殿以外の殿舎について検討する。

(イ) 瑞垣

永禄2年正月16日に、作所から小工へ、昨年瑞垣の請負額を50貫文としたが⁹⁾、清順上人がこの件について知らないため、瑞垣と東宝殿合わせて請負額100貫文の申し出がなされるものの、合意に至らない。

しかし、2月20日条に「小工壹貫当ニ同心候」とあり、また「（2月）廿六日より御作事有、小工壹貫つつ請取也」とあることから、作事に際し小工1人当たりに1貫が支給されたことがわかる。後述するように、東宝殿は単独で工事されたため、瑞垣のみの工事で何らかの合意がなされたと推測される。

(ロ) 東宝殿

永禄2年8月3日条に、

御作事可_レ有之由御申、然者作所御気殿可_レ然之由被_レ申候処、小工衆五百貫請取候者可_レ仕_ニて候、東宝殿可_レ然之由にて事すみ候、二百貫可_ニ請取_ニて候、此内又鍛冶三十五貫可_ニ請取_ニ之由申候間、作所種々被_レ申候て、（後略）

とあり、500貫文が御饌殿単独の請負額を示すかどうか文意が不明確である。しかし、東宝殿の請負額は200貫文で、しかもこの内35貫文が鍛冶分といえる。この東宝殿の場合、他の工事と異なり鍛冶工の請取額が明記される。これは、正殿の立柱直前であった永禄元年5月20日条に「鍛冶屋過分ニ代請取可_レ申之由申候間、延引也、御作事もなき也」とあり、鍛冶工が多額の請取を要求し、工事が延期となったことがある¹⁰⁾。そのため、事前に鍛冶工への支払い額を決めたと考えられる。

(ハ) 西宝殿・御饌殿・外幣殿

永禄3年6月28日、作所は頭工衆に対して、西宝殿・御饌殿の請負金額400貫文に、さらに100貫文を加えた合計500貫文で、西宝殿・御饌殿・外幣殿を請負ように申し出を行う。工事は、7月より始まるものの遅々として進まず、結局、中断する。工事が再開し、本格的に進み始めるのは、禁裏から慶光院清順へ正遷宮費用2万疋

が下される永禄6年5月以降である。前述したように正殿の屋根工事等も再開され、9月23日に正遷宮となる。

以上まとめると、14・15世紀の「請屋」では、正殿以外の殿舎を請負の対象とするのに対し、永禄6年の式年遷宮では、造替された全ての殿舎が請負の対象となる。そして、作所と神宮工の話し合いにより、まず、造営工事全体の請負金額の概算が決められる。次に、工事の進行状況に合わせて、正殿の山入、木作始、立柱・上棟といった重要な工事の区切りごとに、改めてそれぞれの請負額が作所と神宮工の話し合いにより決められ工事が進む。一方、正殿以外の殿舎では、瑞垣と東宝殿が、請負金額の決定後すぐに工事が始まるのに対し、西宝殿・御饌殿・外幣殿は、3社殿一括で請負額が決まるものの、資金難のため工事に遅滞が生じ、工事完了が大幅に遅れる。

3. 天正13年の式年遷宮

(1) 織田信長・豊臣秀吉の造営費用の寄進⁽¹¹⁾

織田信長により、天正10年2月3日に内・外宮合わせて3000貫文の造営費用の寄進が行われ⁽¹²⁾、これをもとに、4月3日に外宮・内宮の順に山口祭が行われる⁽¹³⁾。造営工事では、内・外宮とも、神宮工に山入料700貫文と祝料(頭工2貫文・頭代1貫500文・小工1貫支)が支払われる⁽¹⁴⁾。この造営工事は、6月に起きた本能寺の変により中断する。

豊臣秀吉は、天正12年3月23日に、内・外宮に合わせて金子500枚と米1000石を寄進する旨を申し出るが⁽¹⁵⁾、それに先立ち3月17日に、周養上人に内・外宮造営のための金子250枚を渡す⁽¹⁶⁾。しかし、御師上部貞永の横領により、実際に内・外宮に下された金子は85枚(内宮43枚、外宮42枚)である⁽¹⁷⁾。そして、内・外宮それぞれ頭工方に金子35枚⁽¹⁸⁾と「大工補任料」⁽¹⁹⁾を支払っており、全体の8割以上の支出が神宮工関連である。また、天正13年2月16日に、米1000石が内・外宮に下されるが、内宮分の遣口は、木工の作料・飯米料・雲形料等が450石、鍛冶等の作料・飯米料等が50石となり、建築工匠関係が約半分を占める⁽²⁰⁾。

式年遷宮の祭儀が終了した天正13年11月に、内・外宮ごとに式年遷宮に関する算用状が作成される。内宮には、工事費として総額で金子125枚・米3200石が寄進され、そのうち神宮工へ金子100枚・米1000石が支払われる⁽²¹⁾。また、外宮には、工事費として総額で金子125枚・米2800石が寄進され、そのうち神宮工へ金子100枚・米1000石が支払われる⁽²²⁾。したがって、両宮合わせた総工事費は、金子250枚・米6000石、銭に換算すると約11000貫となる⁽²³⁾。そして、神宮工への支払額は、内・外両とも同額の、銭に換算して約3000貫文となる。

(2) 造営費用の使途

天正12年の内宮一瀬宜荒木田守豊の書状に

一、参千貫文にて御造営申合段、作所并頭工方方、いかほとにて成共、承分候との申事候、御造料ニしたかひ宮数并宮立之様鉢可有之事也、件之定メ之事⁽²⁴⁾

とあり、作所と頭工等の話し合いにより、内宮の造営工事の請負金

表1 天照皇太神宮御造営之注文(天正12年12月)

	費 目	延べ人数	作 料
1	御山入料		700貫文(金子35枚)
2	正殿	3500人	350貫(針料・足代料を含む)
3	東宝殿・西宝殿	3000人	300貫
4	瑞垣	2000人	200貫
5	瑞垣南御門	500人	50貫
6	蕃垣御門	300人	30貫
7	玉串御門	700人	70貫
8	南第四御門	500人	50貫
9	瑞垣西御門	400人	40貫
10	北御門	400人	40貫
11	内院御鳥居削り立て 3ヶ所	100ずつ(300人)	30貫
12	一鳥居・二鳥居(黒木)	30ずつ(60人)	6貫
13	御材木小屋 大工請取		30貫
14	鍛冶小屋		30貫
15	読合小屋		10貫
16	木曳き届ける骨折り料等		90貫
17	芋縄・布綱料		20貫
18	布・役人の食料等		20貫
19	御萱(3000荷)・萱葺の際の神事料		60貫
20	鍛冶作料、鉄		240貫(鍛冶作料120貫、鉄120貫)
21	陸曳料		120貫
22	宮地普請料		50貫
23	諸役人の祭料(14ヶ度)		350貫
24	大工の祭料(13ヶ度)		130貫
25	飯の御桶代、神宝入れの曲物		15貫
26	心御柱(神事料も含む)		10貫
1～26の分 3021貫			
27	荒祭宮		200貫(材木・作料)
28	荒祭宮の絹・布		10貫
29	外幣殿		100貫(材木・作料)
30	御稲倉		100貫(材木・作料)
31	御供調所		100貫(材木・作料)
32	酒殿		50貫(材木・作料)
33	一の殿		50貫(材木・作料)
34	子良館		250貫(材木・作料)
35	正殿の飾り絹36疋他		32貫700文
36	東西宝殿の飾りの絹等		7貫
37	鏡宮		5貫(材木・作料)
38	神主装束料他		60貫
27～38の分 924.7貫(計算すると964.7貫) 惣都合 3945.7貫(計算すると3985.7貫)			

額が3000貫文と決まったことがわかるが、この金額は、前節で検討した神宮工に支払われた金額と一致する。そのため、この造営工事では、まず工事費の総額を決め、次に、その金額に見合った数の殿舎を工事し、また、殿舎の「様鉢」⁽²⁵⁾も工事額に合わせて決められたと推測される。

また、同年12月に作成された「天照皇太神宮御造営之注文」(以下「注文」と略す)⁽²⁶⁾を一覧にしたのが表-1である。「注文」によると、正殿・東西宝殿・瑞垣・諸門・鳥居等については、工匠の延べ人数をもとに作料つまり手間賃が記されるのに対し、荒祭宮・外幣殿・御稲倉等では作料と材木費の合計が記される。つまり、正殿・東西宝殿及び諸門等は、14・15世紀と同様に手間賃が支給され

る手間請負が行われるのに対し、それ以外の殿舎では、式年遷宮としては始めて、手間賃と材料費の一括支給を受ける請負が行われたと考えられる²⁷⁾。

さらに、「注文」には、山入料として 700 貫文（金子 35 枚）が記される。永禄 6 年の外宮式年遷宮でも、山入料 700 貫文が支払われ、織田信長の寄進による造営工事の際にも、山入料 700 貫文が支払われる。この 700 貫文が、山入に際して神宮工に支払われる一つの目安であったのだろう²⁸⁾。

ところで、『天正十三年造営記』の天正 13 年 8 月 22 日条には、
(遷宮時祭) (此)
(前略) 内宮正せんくうのときまつりの料式十九、このうち十四

(調)
まつりハ、大工方への参千貫のうちにてととのい可_レ申候ハ
(残) (執行奉)
かと存候、のこる十五祭の御神事、有様ニとりをこなひたてま
(此跡) (寛) (遷)
つるへき事(中略)このあとのくわん正三年の正せん宮の時の、
(執行) (分)
とりをこなへれたるふんなり (後略)

とある。これは、寛正 3 年（1462）の内宮式年遷宮以前の造営工事について記したものである。この造営工事は、造営費用が 3000 貫で、遷宮の際に行われる祭儀の数が、「注文」より 2 つ多い 29 であるなど、天正 13 年の造営工事と類似点がある。そして、その 29 の祭儀の中で、神宮工が関係する 14 の祭儀費用を造営費用 3000 貫の中から払うと記す。一方、「注文」では、正殿・東西宝殿及び諸門等の工事総額（3021 貫文）とそれ以外の殿舎の工事総額（924.7 貫文）が別々に計上され、両者を合わせると、神宮工が請負った金額よりも 1000 貫文近く多い。おそらく「注文」は見積書であるため²⁹⁾、実際の工事費より多く見積った可能性が高い。例えば「注文」では、遷宮に関わる祭儀 27 全ての費用を見積るが、実際には、上述した寛正 3 年以前の造営と同様に、神宮工が関係した祭儀のみの費用が支出されたと推測される。

さらに、『天正十三年造営記』同日条の後半の、天正 13 年の造営工事について記した部分に、

(宮か) (届) (鹿海)
(前略) 両度一度ニ御木をとくるにより、宮川よりかのめ川
(懸)
迄の川賃、大木に百五十かかりに以_レ造料_二被_レ出_一、大工への三千貫文之内にてハなし、其外の代也
(後略)

とあり、内・外宮の造営工事が同時期に行われたため、臨時的に内宮の料材を宮川より鹿海川まで運ぶ川賃が必要となり、その費用が、3000 貫以外の経費から支出されたことがわかる。つまり、請負額 3000 貫は、通常の造営費用のみを意味し、臨時的な支出については、それ以外の経費から支出したといえる。

以上のように、天正 13 年の式年遷宮は、作所と神宮工の話し合いによって総工事費が 3000 貫文と決められ、その工事額に合わせて、工事を行う殿舎数やその「様鉢」が決まる。また、造営費用 3000 貫文は、神宮工が担当する祭儀の費用等を含むものの、臨時支出となる料材の運送費等は含ない。さらに、正殿・東西宝殿及び諸門等は、従来からの手間請負が採用されるが、それ以外の殿舎では、式年遷宮としては始めて、手間賃と材料費の一括支給を受ける請負が採用される。

4. まとめ

永禄 6 年と天正 13 年の造営工事では、造営費用が乏しいため、作所と神宮工の話し合いにより、まず造営工事全体の請負金額 3000 貫文が決められる。その際、14・15 世紀の「請屋」のように、正殿以外の殿舎を請負の対象とするのではなく、造替する全ての殿舎を請負の対象とする。

そして、永禄 6 年の造営工事では、正殿に関しては、山入、木作始、立柱・上棟といった重要な工事の区切りごとに、改めてそれぞれの請負額が決められ工事が進むが、正殿以外では、殿舎ごとに個別あるいは一括して、改めて請負金額が決められる。これは、清順上人による勧進活動が捗らず、そのため、造営費用の収集額に応じて工事が進められたためと推測される。一方、天正 13 年の造営工事では、信長・秀吉等による造営費用の寄進により工事額が既に定められ、その工事額に合わせて、工事を行う殿舎数やその「様鉢」が決められる。造営費用には、神宮工が担当する祭儀の費用等は含まれるが、臨時支出にあたる料材の運送費等は含まれない。

ところで、永禄 6 年の造営工事や、天正 13 年の正殿や東西宝殿等の造営工事では、従来からの手間請負が採用される。しかし、天正 13 年の造営工事の終盤にかけて行われた上記主要殿舎以外の工事では、手間賃と材料費の一括支給を受ける請負が、式年遷宮としては始めて採用される。これは、天正 13 年の造営工事が、永禄 6 年のように、工事の停滞期に禁裏等から造営費用の寄進を受けるといったような、造営費用の増額が見込めないことから、残りの殿舎については、手元に残った造営費用で工事を完成させるため、神宮工に手間賃と材料費の一括支給を行ったと考えられる。

尚、16 世紀以降の神宮工の系譜についての検討は別稿を予定している。

本稿は、平成 19 年度科学研究費補助金 基盤研究 (C)「室町時代～江戸時代前期における建築工匠の系譜と活動形態に関する基礎的研究」の研究成果の一部である。

注

注 1) 拙稿①「作所・小作所の性格と神宮工の大工職補任について―中世伊勢神宮の造営組織に関する研究 その 1―」日本建築学会計画系論文集 543 号 2001 年 5 月、②「神宮工の大工職継承の実態について―中世伊勢神宮の造営組織に関する研究 その 2―」日本建築学会計画系論文集 554 号 2002 年 4 月、③「神宮工の大工職併有と「請屋」「請工」について―中世伊勢神宮の造営組織に関する研究 その 3―」日本建築学会計画系論文集 591 号 2005 年 5 月。後に、拙著『中世日本建築工匠史』相模書房 2006 年に所収。

注 2) 福山敏男「神宮の建築とその歴史」『神宮』小学館 昭和 58 年。

注 3) 大河直躬『番匠』法政大学出版局 1978 年 p.171。

注 4) 前掲注 1 拙稿③及び、拙著第 2 部第 2 章第 4 節参照。

注 5) 『神宮遷宮記』第 4 卷所収。以下、第 2 章において「永禄記」からの引用史料については出典を略す。尚、「永禄記」の筆録者は作所松木忠彦である。

注 6) 「外宮天文引付」35 (『三重県史』中世 1 (上) (以下『県史』と略す))。ところで、「伊勢神宮頭工等申状写」(「退蔵文庫旧蔵神宮関係古文書」52 『県史』中世 1 (下)) に「然者三千貫文之内七百貫文、御山入料ニひきて、残式千三百貫文之内ノわりニて御座可有と存候」とあり、3000 貫文

から山入料 700 貫文を引いた 2300 貫文を神宮工で分配すると記される。また、「外宮頭工等申状案」（「退蔵文庫田藏神宮関係古文書」72『県史』中世 1（下））では、「外宮正遷宮清順上人御造料、永楽三千貫文請取申候、此払口、千四百八拾貫五百文、御材木何かニ遣申候、残千五百十九貫五百文、頭・頭代・小工分口之事」とあり、52 号文書に記された金額よりも少ない 1519 貫 500 文を神宮工で分配すると記す。この文書には、「御材木何かニ遣申候」とあり、払口（1480 貫 500 文）の中に、材木費が含まれるかのような記述内容である。両文書とも年号が欠落し、両文書の前後の内容から、中世末から近世初めにかけて作成された文書と推測される。そのため、両文書の信憑性は低く、上記内容については今後の検討課題としたい。

注 7) 口抜料とは、造営工事等の際に作所が得る仲介手数料のことか。700 貫文に対する口抜料は 21 貫文であり、費用の 3 %程度と考えられる。尚、永禄元年 5 月 5 日条に、「口ぬき山入之時三文引いて候」とある。

注 8) 「外宮引付」44（『県史』中世 1（上））。

注 9) 「永禄記」永禄元年の各条には、瑞垣を 50 貫文で請負う記述は見出せない。「永禄記」の欠落部分に記されたものか。

注 10) 永禄元年 6 月 1 日に 80 貫文、同月 13 日に 130 貫文を鍛冶工に提示したが合意せず、結局 160 貫文で合意する。

注 11) 織田信長・豊臣秀吉の造営費用の寄進については、従来、史料に即して明確に論じられることが少なかった。中西正幸氏は、「秀吉も金子五百枚と米千石とを、それぞれ両宮遷宮費として寄進した。（中略）造営料六千五百貫文は定額よりもはるかに少なく」（同氏著『神宮式年遷宮の歴史と祭儀』大明堂 1995 年 47 頁）と記すが、小島鉦作氏は、6500 貫は神宮側が造営費注文に記した控えめの額であり、秀吉はこれを上回る「造営料として一万貫と金子五百枚を供進している。」と述べる（同氏著『伊勢神宮史の研究』小島鉦著作集第 2 巻 吉川弘文館 1985 年 281 頁及び 290 頁）。小島鉦作氏は、『天正十三年御遷宮記』天正 13 年正月 22 日条の「從_レ秀吉_一一万貫御下行、金子五百枚可_レ有_二御渡_一由、先五千貫文之通御代付を以、金子貳百五十枚請取申由」から上述のように造営費用が「1 万貫と金子 500 枚」と解しているが、これは引用箇所の後半部分からもわかるように「1 万貫分として金子 500 枚分を渡す」と解すべきである。尚、秀吉は上記引用箇所にもあるように、金子 500 枚を寄進すると表明するが、実際には、本節で取り上げる天正 13 年 11 月の算用状から、内・外宮あわせて金子 250 枚しか寄進していない。以上のように、織田信長・豊臣秀吉の造営費用の寄進状況等については、幾つかの錯誤がある。そのため、本節では、史料に即しながら寄進状況の確認作業も併せて行う。

注 12) 「外宮天正遷宮記（異本）」（『神宮遷宮記』第 4 巻 国書刊行会 平成 4 年所収）。

注 13) 「外宮天正遷宮記」（『神宮遷宮記』第 4 巻 国書刊行会 平成 4 年所収）。

注 14) 「天正十三年御遷宮記」（『神宮遷宮記』第 4 巻 国書刊行会 平成 4 年所収）、「外宮遷宮用途料算用状」（『県史』中世 1（下）1999 年 第 2 部 慶光院文書 85）。

注 15) 「外宮天正遷宮記（異本）」尚、島津義久も、（天正 13 年_カ）5 月 16 日

に銀子 1000 両を寄進する。（「島津義久寄進状」『県史』中世 1（下）第 1 部 文書 27）。

注 16) 「羽柴秀吉消息（折紙）」（慶光院文書 78）。

注 17) 「天正年中記録」天正 12 年 3 月 24 日条（『三重県史』中世神宮関係資料 補遺 2000 年 第 2 部 記録 1）尚、横領された金子 165 枚（内宮：82 枚、外宮：83 枚）は、天正 13 年正月 28 日に下される（「両宮遷宮料請取覚」慶光院文書 82）。

注 18) 内宮：「周養上人・内宮一禰宜荒木田守豊連署書状写」（慶光院文書 183）、外宮：「周養上人・外宮一禰宜度会貴彦連署書状写」（慶光院文書 79）

注 19) 内宮では金子 1 枚、外宮では 8 両。大工職補任料は、本来、建築工匠が神宮へ支払うべきものである。この場合の「大工補任料」は、神宮が建築工匠へ支払う祝料等を意味するのかもしれない。

注 20) 「内宮一禰宜荒木田守豊請文」（『県史』中世 1（下）別冊 引付「天正拾二年より拾六年迄之事」13）。尚、本文に記した以外にも、秀吉からの寄進等があったと考えられる。後述するように、天正 13 年 11 月の算用状にはその総額が記されるが、寄進の経緯については、本文に記した以外、史料上確認することは出来ない。

注 21) 「周養上人・内宮一禰宜荒木田守通連署内宮遷宮料算用状」（慶光院文書 88）及び「内宮一頭大夫等連署遷宮用途料請取状（折紙）」（慶光院文書 89）

注 22) 「外宮一禰宜・同神主中連署遷宮料算用状」（慶光院文書 91）及び「外宮頭工等連署遷宮料足請取状（折紙）」（慶光院文書 92）

注 23) 1 石を 1 貫文、金子 1 枚を 20 貫文として概算。

注 24) 「内宮一禰宜荒木田守豊書状」（『県史』中世 1（下）別冊 3「引付天正拾二年より拾六年迄之事」－3）。書状の当該箇所には年月日は記されないが、この前が天正 12 年 3 月 25 日条であり、後ろが 4 月 15 日頃（この条は、頭工に金子 20 枚を渡す記事であり、これは「天正年中記録」の同日条より確認できる。）とみなされる。そのため、当該箇所は、3 月下旬から 4 月上旬にかけて記されたと考えられる。

注 25) 内宮では、この天正 13 年の式年遷宮により、85 年ぶりに正殿が造営され、その規模・構造・形式は、古図等をもとに作所と神宮工の話し合いにより決められたとされる（福山敏男『神宮』小学館 昭和 58 年 127 頁）。造営文書中に「様軀」を説明する記述はないが、福山博士の指摘する「規模・構造・形式」のことであろうか。今後の課題としたい。

注 26) 「天正十三年御遷宮記」

注 27) 内宮別宮風日祈宮の文明 11 年（1479）遷宮においても、手間賃と材料費の一括支給を受けた造営工事が行われた。しかし、これは別宮一社だけの小規模な工事であり、本宮関係の大規模な工事では、天正 13 年の造営工事が最初といえる。

注 28) 天正 10 年の山入から、わずか 2 年後に再び山入りを行う。造営費用の寄進者が、信長から秀吉に代わったため、再度山入りを行ったのであろうか。

注 29) 川上貢氏は、注文を「中世に「損色」と同様に見積書と考定される文書」と指摘する（同氏『日本建築史論考』中央公論美術出版 1998 年 352 頁）。

（2007 年 12 月 5 日原稿受理、2008 年 2 月 4 日採用決定）